

## 進捗状況の概要【1ページ】

本スーパーグローバル大学創成支援事業は、本学が開学以来実践してきた「全て英語の講義」、「1年間の海外留学必修」、「コースナンバリング」、「GPA制度と厳格な留学単位互換」、「秋入学」、「1年次の全寮制」、「90%のキャンパス内居住率」、「任期制・年俸制」、「テニユア制」、「迅速な意思決定が可能なガバナンス体制」等の様々な取組に加え、「大学の世界展開力事業」で開発した学生の課題発見・解決力強化の教育プログラムと、「グローバル人材育成推進事業」で整備した能動的学修支援体制と教育力強化の取組を継続・発展させ、高等教育におけるグローバル対応の更なる強化を図るものである。

本構想は、(1)24時間リベラルアーツ教育の推進（テーマ別ハウス群）、(2)世界標準カリキュラムの充実（日本研究科目の充実等）、(3)日本の英語教育改革の推進（イングリッシュビレッジ、ティーチャーズセミナーの実施）、(4)国際ベンチマーキングの実施、から成る4つのプロジェクトで構成されている。これらの取組を通して「日本発ワールドクラスリベラルアーツカレッジ」へ進化することを目標とし、その過程において、教育の仕組みと質を欧米のリベラルアーツ大学の水準に引き上げるとともに、日本に軸足を据えつつ、世界に向けて「日本を発信」する人材を育成することを目指すものである。

(1)24時間リベラルアーツ教育の推進においては、本学が運営するキャンパス内の既存の学生宿舎を、学生の自主的なテーマ設定に応じて居住させる「テーマ別ハウス」を開設し、2回の学生アンケート結果と担当教員の意向を踏まえ、全人教育につなげることを目的に平成27年度から運用を開始した。直近の平成28年度では、春・秋学期合わせて6つのハウスを開設した（Nihongo House、Fitness House、Entrepreneur House等）。開始して2年を経過したところであり、体験率は12.6%であるが、試行錯誤の期間を経て、いかなるテーマが居住空間における学習の共同体としてのハウスの活動に適しているのかの知見を得た。また、建物の構造的な課題も判明し、新たな施設整備を行う際の示唆を得ることができた。

(2)世界標準カリキュラムについては、特に日本研究科目群の拡大・強化を図るため、教員2名を採用し、16の新規科目を開講した結果（19科目から35科目へ）、同科目群の履修者が200名増加した。全履修者における留学生の割合も28%から36%に増加し、日本人学生と外国人留学生の双方にとって有益な科目群が整備されてきている。平成28年9月には、同科目群の拡充と海外提携校向けのパートナーズプログラムの創設・運営を目的に日本学修センターを設置した。また、世界標準カリキュラムの構築のため、MOOCsと反転授業の導入による本学の講義レベルの国際化や国際協働PBLの推進を目標として掲げたが、MOOCsについては、平成28年6月に「AIU MOOCs ページ」をMoodle（学修管理システム）上に開設し、中・高の英語教員向け教材や日本や秋田を題材にしたオンライン教材の配信を開始した。このほか、マサチューセッツ工科大学のオンライン教材を本学の反転授業の一部として利用した。国際協働PBLについては、平成28年度にマレーシアのボルネオ島でグリーンエコノミーについて、また、タイの東北部ではSDGsに関するPBLを新たに実施した。パートナーズプログラムでは、平成28年及び平成29年1～2月にオーストラリア国立大学と共同開発した上級日本語・秋田学冬期集中プログラムを実施したほか、平成29年5～6月に米国ウィリアム・アンド・メアリー大学と連携した日本の歴史探訪セミナーを実施した。

(3)イングリッシュビレッジは、トレーニングを受けた本学の学生（学部生、大学院生、留学生）が小中高生を対象に「英語で英語を学ぶ」ことを体験させるもので、参加する生徒数が増加しているほか、高い満足度とともにリピーターも増えてきている。ティーチャーズセミナーは秋田県教育委員会と連携し、小中高の英語教員に対し様々な研修プログラムを実施しており、ニーズの広がりを実感している。

(4)国際ベンチマーキングでは、新入生と卒業前の学生を対象に米国のCLA+（Collegiate Learning Assessment Plus）を実施し、本学での学修の成果を分析する試みを開始した。また、米国のウィリアム・アンド・メアリー大学、ジョージタウン大学、ディキンソン大学とベンチマーキングを協同で実施し、平成28年1月には教育課程と教育方法について、平成29年5月には採用や給与、テニユア制等の人事制度について訪問調査を行い、本学に導入すべきグッドプラクティスがリストアップされたところである。これら4つのプロジェクトを遂行していくための学内組織として、スーパーグローバル大学創成支援事業推進会議、国際教養教育推進機構、アジア地域研究連携機構のほか、これらの組織下に能動的学修・評価センターや日本学修センター等を設置するなど、本構想実現のための体制も整備した。これまでは、学内組織の再構築や海外大学とのネットワーク強化、情報収集等の基盤固めと試行錯誤の期間であったが、イングリッシュビレッジなど非常に高い成果を挙げた活動もあり、概ね順調に推移している。

## 特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

- ①4つのプロジェクトを実施する過程において、最も試行錯誤を重ね多くの発見があったのが「24 時間リベラルアーツ教育の推進」における「テーマ別ハウス群」である。当初設定した Public Policy House、Grad Track House や続いて設定した International Customs House、Entrepreneur House は、学生ニーズにそぐわなかった。これは、教員が主導してテーマを設定しハウスを運営したことにより、結果として学生が受動的になり、学生主体のダイナミクスや学生自身の成長実感が生じ難く、継続できなかつたためである。これを教訓として、現在は、顧問教員が活動の質を担保しつつも運営は学生自身が行うこととし、ハウス毎にリーダーを選ばせているほか、予算計画、活動計画、活動報告会などについて全て学生自治とする体制を整えた。また、テーマに基づいたプロジェクトに日本人学生と外国人留学生が協働で取り組むことで、自律的な学びのコミュニティとして機能するようになっていく。今後の課題は、アパートが個室毎に外ドアから入る構造になっていることから、学生がラウンジに自然に集まりにくい点への対処である。
- ②「世界標準カリキュラム構築」における「日本研究科目群の充実」に関しては、初級から上級までバランスの取れた 16 科目を新たに開講したほか、秋田に焦点を当てた科目を開講したことにより、体系的かつ地域色を活かした日本学を学ぶこととなった。これにより、本学の学生が海外で「日本を発信するアンバサダー」たり得るため必要なカリキュラムの提供が実現し、その意義は大きいと捉えている。また、本学の日本語科目及び日本研究科目は海外提携校からの評価が極めて高く、留学生を継続的に獲得する魅力の一つとなっているが、これらのニーズにオーダーメイド型で応えたものがパートナーズプログラムである。オーストラリア国立大学、米国ウィリアム・アンド・メアリー大学という各国の名門大学と独自プログラム（母校での単位に変換可能）を共同開発したことは特筆に値する。また、「大学の世界展開力事業」では米国に限定されていた国際協働 PBL を新たにアジアで展開することにより、学生が取り組む課題をより多様化するとともに、PBL を協働実施するアジアの提携校との協力関係を強化させることができた。
- ③「イングリッシュビレッジ」では、一定の訓練に合格した学生が講師として認定されるが、認定された学生の主体性や行動力、モチベーションは非常に高く、外国人留学生との協働や教職課程における学修との相乗効果も含め、教育効果は極めて大きいものと評価している。一方、参加校による評価も非常に高く、修学旅行に組み入れたいとの要望が寄せられているほか、参加した生徒が本学に憧れ入学してくる例もある。こうした活動の継続性を担保するため、地元の観光協会と協定を結んで窓口業務を担ってもらうなどの仕組みを構築したところであり、本補助事業終了後も自立的な運営が見込めつつある。
- ④「国際ベンチマーキング」における訪問調査により、コースナンバリングやシラバス等、本学が既に実践している多くの取組は世界標準のレベルにあることが確認できた。一方、ライティング能力の強化を通じた論理的・批判的思考力向上への取組は、訪問した 3 大学との比較では不十分であることが明らかになった。こうした状況を踏まえ、日本人が一般的に苦手とする論理的展開力や構成力の高い文章を書く能力を段階的、体系的に体得できるよう、カリキュラムの見直しに着手することとしている。

上記の 4 つの主要なプロジェクトをはじめとする本構想の各取組において、共通の土台となっているものは 185 校という海外提携校（9 割以上と活発に交流あり）の数と多様性、そして各校との強い信頼関係と高い親密度である。海外提携校は、本学が英語で授業を行っていること、日本語及び日本研究科目が充実していること、授業の内容と質が単位互換に値すること、テーマ別ハウスを含むキャンパス内のアパートへの居住を 100%保証していること、これによりキャンパスに学生のコミュニティが存在していること、日本人学生及び秋田の地域の人々との交流機会が多くあること、地域の行事や伝統文化に触れる機会は日本の田舎でなければ経験し難いこと、そして何より教職員による面倒見が良いことを、これまで学生を派遣した経験則から学んでいる。それゆえ、本学との提携関係を単なる学生を交換留学させるためのツールとして考えるのではなく、日本研究科目の共同開発、双方から教員と学生を参画させる国際協働 PBL の創設、国際ベンチマーキングの協同実施という形で、提携関係を様々に発展させることに非常に前向きに協力するのである。

「日本発ワールドクラスリベラルアーツカレッジ」構想は、単に「日本を発信するアンバサダー」となる人材を育成することを目指しているのではなく、海外大学のグッドプラクティスを、カリキュラムや授業、キャンパスでの生活や課外活動に採り入れた大学が日本の秋田にあることを海外提携校に知らしめ、共に学術教育と全人教育の質を高めていく関係に発展させることにある。4 つのプロジェクトが、本学と海外提携校間におけるこの基本的枠組と理解の上に推し進められていることは特筆に値すると考える。